

授業改善における教科内容研究の意義

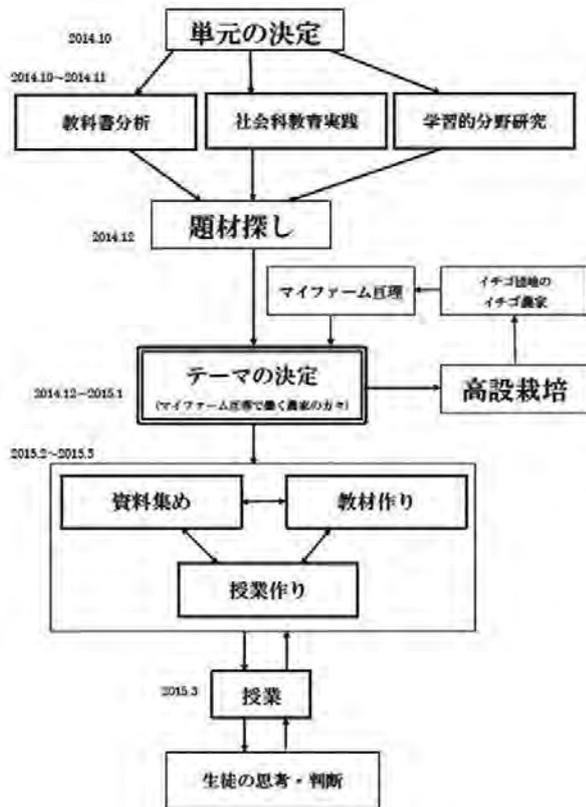
—特に生徒の思考・判断の捉え方をめぐって—

教育デザインコース 社会領域

藤本 健 / 国分 誠 / 冨家遼子 / 鈴木洋平 / 福田真之 /
宮崎真和 / 山口満 / 八木翔吾 / 萩原秀文

□テーマ設定の理由と研究の経緯

附属校と連携して理論と実践の連携・結合がいかんして成り立つのかという問題意識から、教科内容研究の意義を明らかにする。教科内容研究により授業者の学問的な地図を広げ、附属中の生徒たちの倫理を分析して、授業者のねらいと生徒の思考・判断・捉え方のズレに焦点を合わせて研究を進めた。



□研究のアプローチ

(1) 授業づくりにおける教科内容研究

- ①中学校社会科の各教科書の東方地方の記述分析を分析する。
- ②教科書記述の背景にある各学問分野における研究蓄積をレビューする。
- ③社会科教育実践史における代表的な実践を分析する。

(2) 授業分析

- ①上記の研究実績を授業者に提供し、授業の検討を行う。
- ②各授業を参観し、分析する。授業記録、生徒の記録を授業者に提供する。各授業後、事後検討会に参加する。

□成果と課題

授業記録や抽出児の分析については、生徒たちがなぜ授業者の意図に外れたのか、また外れなかったのかということを生徒たちの見ている世界（生活背景）にまで迫って考察することができなかったことが課題にあげられる。生徒の思考は、一人ひとりの生活（学校・家庭・消費文化）によって形成されていくものである。今回の実践において、生徒たちの生活を踏まえた上で授業者との枠組みとのズレを考察する、というところまで迫れなかった。

学術研究を様々な分野において行ったため、東北地方について裾野（歴史・文化・経済・産業など）を広げることができた。その結果、教材研究を多角的・多面的な分野から行うことができた（一つの分野だけでその地方を教えることなく）ので、それぞれの分野を適宜関連付けながら授業づくり・教材研究を行うことができた。これらの学術研究の成果を、生徒たちが齋藤さんたちのことを他人事にしないような教材を導き出すための試行錯誤の過程でいかすことができた。

教材研究では、私たち自身が宮城県の亘理町に行くことがかなわず（時間的な制約と経済的な制約から）、齋藤さんたちの生活に迫ることができたのかということに関して疑問が残った。授業中に提示した資料もできるだけ亘理町の写真等を使用したのが、その資料が齋藤さんたちの見ている世界（生活）と一致したのかも疑問が残る。